

ウトロ海域における保全と利用の取り組みの進捗状況について 2025年（令和7年）度知床ウトロ海域環境保全協議会活動報告

2025年度は、毎年7月に行うイベント「海鳥 WEEK」を継続して開催した。道外へのイベント出展は実施しなかったものの、道内イベント2つに出展してウトロ海域環境の保全に関する取り組みの認知度向上に注力した。実際の保全活動として、8～9月に計4回の海岸ゴミ拾い活動を実施し、海鳥の生息環境の保護と共に観光船から見える景勝地の美化にもつなげた。海域環境のさらなる向上を目指し、初めて斜里町内でゴミ拾いを実施する団体や、留萌管内羽幌町の海鳥センターと情報交換会を行った。

「海鳥 WEEK」の企画・実施

「海鳥 WEEK」は絶滅危惧種のケイマフリをはじめとした海鳥を通して、知床の海や観光に携わる関係者が知床海域の環境保全と適正利用について見直し考えていく期間として設定していると共に、観光地知床を訪れた来訪者に対しても希少な海鳥が棲む知床の海域についての理解を深めてもらう期間として設定している。本年度は、7月19日～7月31日を期間に設定して、以下3つの企画を実施した。

1. うみどりトーク

- ・ 海鳥の専門家（福田氏＝同協議会事務局長）が観光船の船上やホテル内で観光客や町民向けに、知床の海鳥や海域環境を解説するイベント
 - ホテルトーク（計4回実施） 参加者数 89人
 - 観光船解説トーク（計3回実施） 参加者数 87人
- ※観光船解説トークは4回企画し、そのうち1回は天候不良で中止となった。

- ・ 7月23日に、観光船おーろらと知床自然センターのInstagramを利用してインスタライブを実施した。ウトロ漁港で実際にケイマフリやオロンコ岩で繁殖しているオオセグロカモメやウミウを観察しながら配信を行い、視聴者からの質問にも随時回答した。アーカイブ閲覧者数 3,414人（2月17日現在）。

2. 海鳥夕暮れクルーズ

海鳥を観察しやすい夕暮れの時間に出港して、専門家（福田氏）の解説を聞きながら海鳥観察を目的とした観光船のツアー。本年度は自然公園等保護基金の助成金を受けて計2回実施。ウトロ愛護少年団と知床博物館キッズらを対象に無料で実施した。

7月19日（土） 参加者数 38人

7月20日（日） 参加者数 79人

3. 知床世界遺産センターでの知床海の特別展

7月17日から8月3日にかけて、知床世界遺産センターのレクチャールームで知床半島のジオラマや知床の海鳥に関する資料や写真の展示を行った。



観光船解説トーク（7月23日）



夕暮れクルーズ（7月20日）

海岸線でのゴミ拾い活動

8～9月に計4回のゴミ拾い活動を実施。観光名所としても名高く観光船の航行ルートでもあるフレペの滝付近やプユニ岬―幌別川間の海岸、ウトロ漁港を中心に、小型船に積載できる量のゴミ回収を行った。漂着ゴミは漁業系のゴミが多く、特にプラスチック製の浮き球が大多数を占めた他ペットボトルや空き缶などの一般ゴミも多く回収した。

漁具の処分方法について、割れない浮き球は根室管内の産廃業者がリサイクル品として引き取ってくれ、昨年度まで課題となっていた漁具の処分方法で進展があった。一方で、より確立した処分・活用方法までには至っておらず、関係機関との協力体制の構築が急務となっている。



プユニ岬付近の海岸での作業（9月5日）



割れてない浮き球をリサイクルへ

イベント出展

本年度は道内のイベントに計2回出展し、知床の海鳥や海洋環境についての周知に努めた。例年参加している

1. 知床サステイナブルフェス 2025

- ・ 斜里町ウトロの知床自然センターで10月11日（土）、12日（日）に開催された知床サステイナブルフェスに出展した。子供向けのオリジナルタンブラー作り体験などを開き海鳥に関する説明などをして普及を行った。

2. ねむろバードランドフェスティバル 2026

- ・ 根室市で1月24日（土）、25日（日）に開催されたねむろバードランドフェスティバルに出展。同イベントでは、野鳥観察のツアーを中心に野鳥に関する講演や展示・物販会が行われた。
- ・ 当協議会が手掛けたケイマフリの巣の模型やパネル展示、オリジナルタンブラー作り体験などを通して海鳥の生息環境を来場者に伝えた。同イベントは野鳥に関心がある客層が多い一方で、来場者の出展ブースへの滞在時間はごく短いため、海洋環境に関する啓発という点ではアプローチ方法を精査する必要がある。



出展ブース



タンブラー作り体験

- ### 3. 例年出展している「ジャパンバードフェスティバル」（千葉県我孫子市）は予算不足のため不参加。また、「大阪自然史フェスティバル」（大阪市）はイベント自体が非開催だった。

海洋ゴミ回収の向上に向けた情報交換活動

海洋ゴミの処分や活用方法の向上を目的に10月、斜里町内でゴミ回収している団体や個人を集めて情報交換会を開いた。また11月には旭山動物園（旭川市）と海鳥センター（羽幌町）を訪れ、海鳥の保護活動や情報発信、海洋ゴミ問題に関する取り組みを聞いた。

1. 知床ゴミ拾い相談会の実施

- 10月24日、知床世界遺産センターで、当協議会を含め斜里町内でゴミ拾い活動をする4団体と斜里町の職員らを集めて知床におけるゴミ問題について意見を出し合う相談会を実施した。
- 話し合いを通じ、①ゴミ回収後の出口（処分・資源化）の仕組みが未整備②自治体単独では対応できない構造問題③ゴミ回収・保管・運搬のインフラ不足—といった本質的問題が浮き彫りになった。
- 知床は世界自然遺産というネームバリューから、志のある市民や協力可能なボランティア等がすでに存在している。課題は「回収する人がいない」ことではなく、回収後の仕組みと構造設計が未整備なことである。

2. 旭川・羽幌視察

- 11月14日に旭山動物園を視察。パネルによる展示教育にも力を入れており、当協議会としても一般の人に向けた、海鳥の普及や海洋環境の意識啓発の活動発展のヒントとなった。15日には海鳥センターでは、「シーバードフレンドリー認証制度」という同センター独自の産業と連携した認証制度について解説を受け、清掃活動ではなく「保全×産業連携」という新たな視点が得られた。
- 両施設ともから、展示や人的連携の検討について前向きな回答を得ることが出来た。



ゴミ拾い相談会



視察した海鳥センターで職員と意見交換

ケイマフリの生息・繁殖状況

ウトロ漁港からエエイシレド岬までの区間において、6月～8月中旬にケイマフリの生息・営巣数および親鳥がヒナに給餌する食物の調査を実施した。

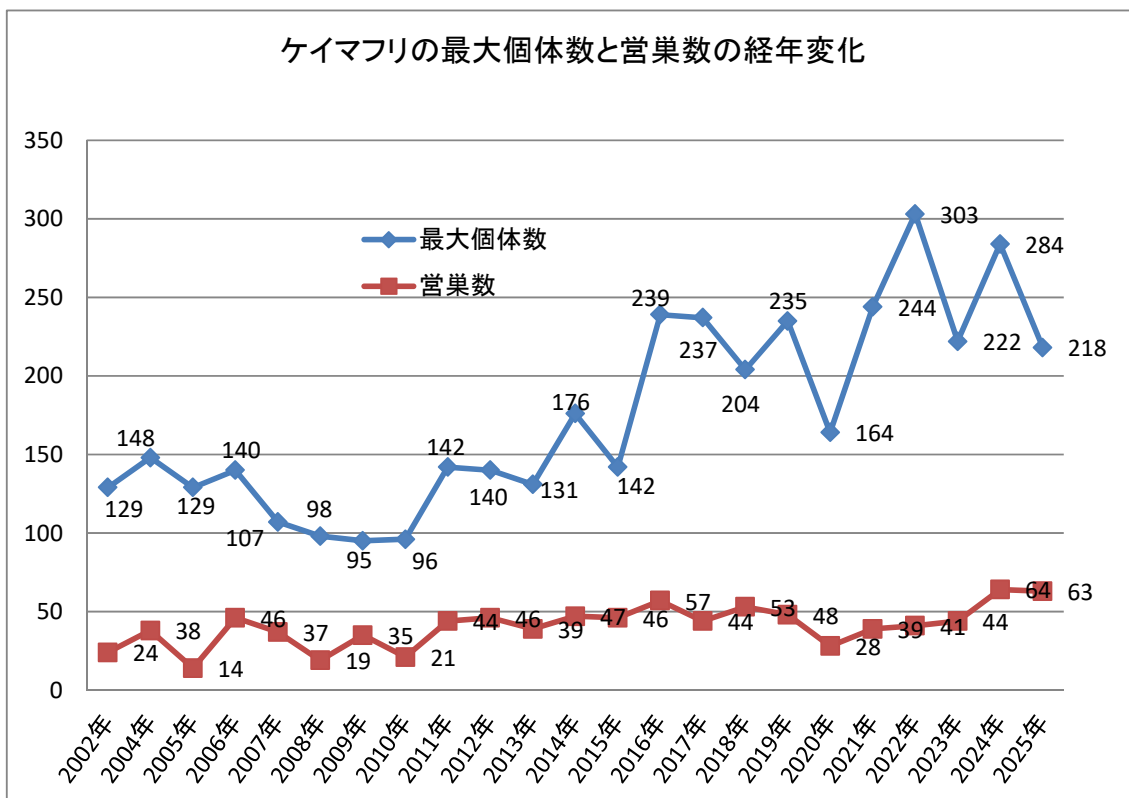


図 - 1) ケイマフリの営巣数の経年変化（2002年～2025年）

1. ケイマフリの営巣数の海域別経年変化

表 - 1) ケイマフリの営巣数数の海域別経年変化（2002年～2012年）

地域名/年	2002年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年
プユニ岬～男の涙	10	11	7	25	24	6	25	9	23	21
男の涙～象の鼻	10	3	0	4	1	1	1	3	6	4
象の鼻～岩尾別	1	4	5	8	2	0	1	1	0	1
岩尾別台地	0	12	2	4	7	8	4	6	5	8
知床五湖の断崖	0	1	0	2	2	4	3	2	9	11
トークシモイ	3	7	0	3	1	0	1	0	1	1
Total	24	38	14	46	37	19	35	21	44	46

表-2) ケイマフリの営巣数の海域別経年変化（2013年～2025年）

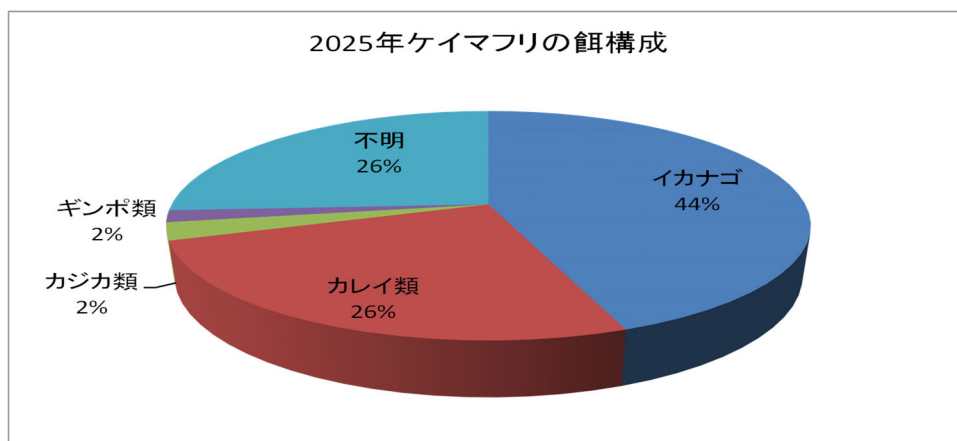
地域名/年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年	2025年
プユニ岬～男の涙	19	25	25	26	18	34	26	10	21	27	21	40	33
男の涙～象の鼻	4	4	2	0	4	5	8	3	2	2	4	3	6
象の鼻～岩尾別	0	0	1	3	2	0	0	1	1	0	2	2	1
岩尾別台地	10	12	7	25	15	3	6	11	12	9	12	14	21
知床五湖の断崖	6	5	10	2	6	4	2	1	2	1	0	1	1
トークシモイ	0	1	1	1	1	7	6	2	1	2	5	4	1
Total	39	47	46	57	46	53	48	28	39	41	44	64	63

2025年の最大個体数は7月13日の218羽であった。営巣数は63巣を確認した。最大個体数は前年の2024年の284羽と比較して66羽減少した。営巣数は2024年が64巣だったためほぼ変わらない状況である。

2. ケイマフリの餌構成

表-3) 2025年のケイマフリの餌構成

No	月日	イカナゴ	カレイ類	カジカ類	ギンポ類	不明	合計
1	6月17日	1	1				2
2	6月29日	16	12	2		12	42
3	6月30日	6	6			8	20
4	7月4日	9	1			1	11
5	7月7日	3	2		1		6
6	7月9日	1					1
7	7月13日	3				2	5
8	7月19日	1	1			1	3
9	7月20日	10	5	1	1	5	22
10	7月23日	3	3			2	8
		53	31	3	2	31	



2025年ケイマフリの餌構成の割合

表-4) ケイマフリの餌構成の経年変化

	2011年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年	2025年
イカナゴ	80%	76%	88%	94%	97%	96%	94%	94%	76%	48%	75%	55%	85%	44%
ギンポ類	6%	10%	7%		3%	4%	3%	1%	4%	9%	15%	17%		2%
カレイ類	1%	2%							8%	13%	3%	10%	5%	26%
カジカ類	5%	7%	5%	3%					4%	3%	2%	12%		2%
エゾメバル									6%					
カタクチイワシ	2%												7%	
不明		5%		3%			3%	3%	2%	27%	5%	6%	3%	26%

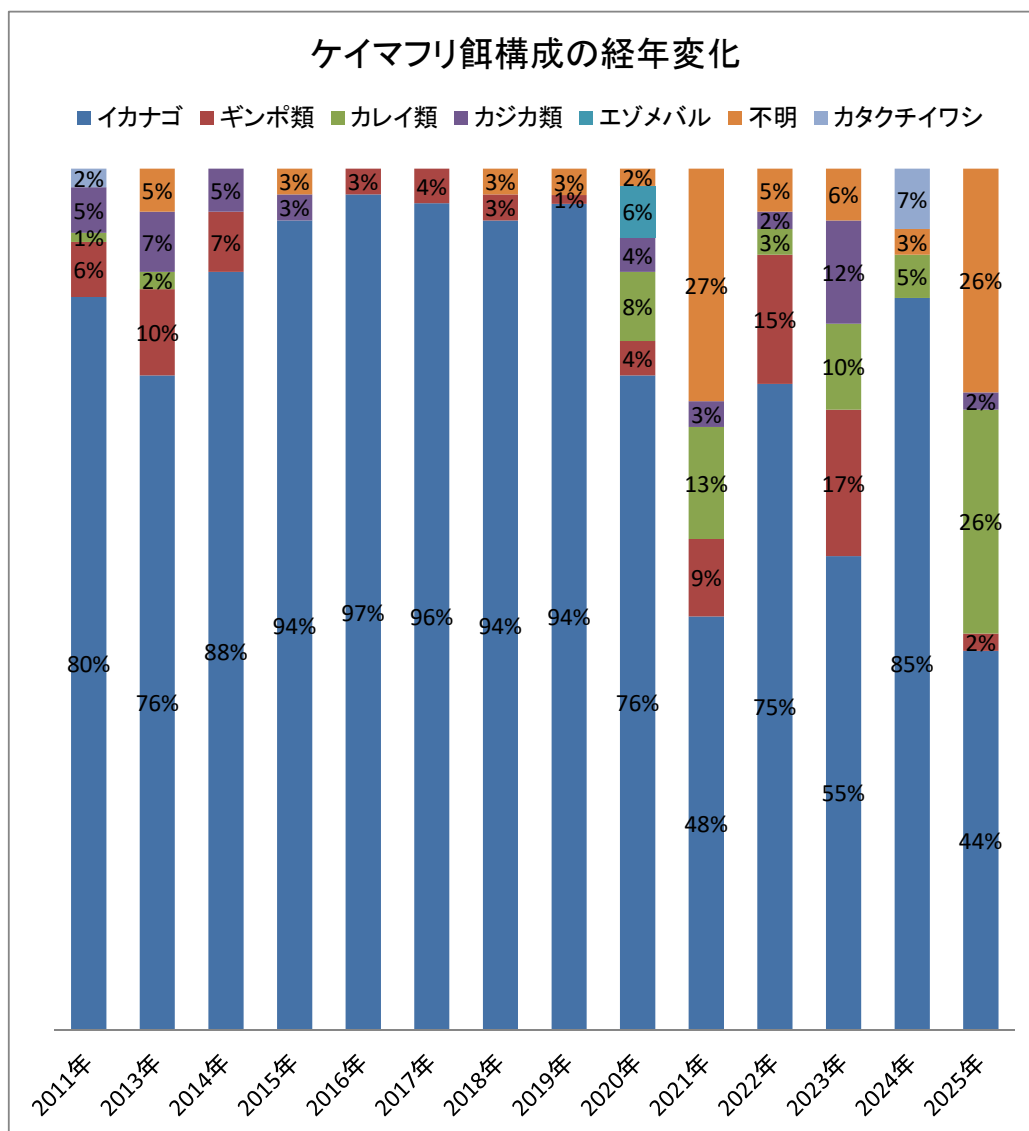


図-2) ケイマフリの餌構成の経年変化（2011年～2025年）

ケイマフリの生息状況を知る上で重要な餌構成についての調査も行った。この調査はケイマフリの生息海域の小魚の生息状況も推察することができる。2025年のケイマフリがヒナのために持ち帰る餌構成は、イカナゴ53例44%・カレイ類31例26%でカジカ類3例2%・ギンポ類2%で不明種31例26%であった。不明種は形からイカナゴでもカレイ類でもない種であった。2011年からの餌構成の調査の中でイカナゴの割合が最も低い44%であった。イカナゴは高い海水温を避けるため今年は海水温が高い状況が続いたことからイカナゴの生息数が少なかったと考えられる。

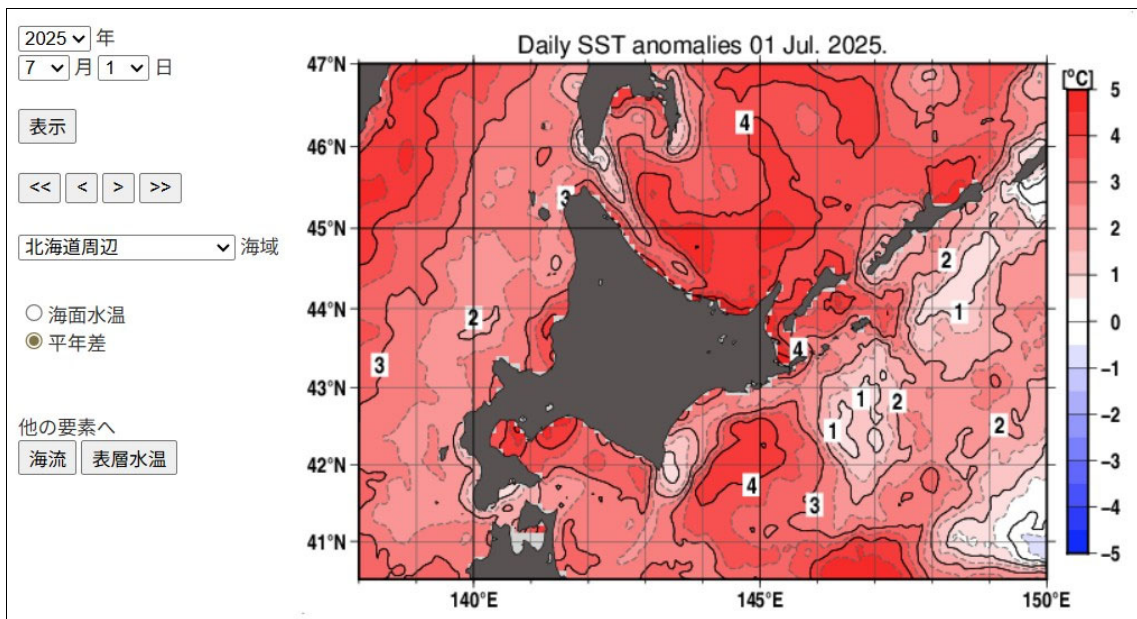


図-3) 2025年7月1日の日別海面水温の平年比